

令和7年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「 「未来につなげる」ために 」

東京都 葛飾区立新宿中学校 三年 菅原 蒼生

来年度、私は高校生になります。進路や将来について考えることが増える中で、先日受けた理科の授業が、私の心に強く残りました。それは、平成25年10月に伊豆大島で起きた土砂災害について学ぶ授業でした。担当の先生は、災害のあとに伊豆大島の学校で勤務した経験がある方で、地域の方々から実際に聞いた話や、現地の様子を交えて教えてくれました。

先生は、「私は災害を直接経験してはいません。でも、災害の爪痕が残る場所で何年も働きながら、町の方々から当時の話を聞いてきました。」と語ってくれました。その言葉には、ただの教科書には載っていない『生きた記憶』が詰まっているように感じました。

先生によると、土砂災害が起きたのは、記録的な大雨が島を襲った夜だったそうです。土石流は山の上から一気に流れ下り、元町地区では大きな被害が出ました。川のようになった泥水が家を飲み込み、多くの人が命を落としたという話を聞き、私は自然の力の恐ろしさを感じました。

先生は、地域のあるおばあさんの話を紹介してくれました。「あの夜、雷のような音がして、外を見たら、もう家の前は川のようだった。家族と一緒に逃げる時間もなかった」と。その声は涙混じりだったそうです。こうした話を何度も聞くうち、先生自身も、「伝えることの重さ」を感じるようになりましたと話していました。

また、この授業では「ハザードマップ」の話もありました。伊豆大島には災害前から土砂災害の危険を示す地図があり、実際に被害の出た場所は危険区域として色が塗られていたそうです。私は「ハザードマップって、見るだけで意味あるの?」と思っていましたが、この話を聞いて、それが命を守るために『地図』なのだと初めて実感しました。

授業の後、私は図書館で伊豆大島の災害跡地の資料を調べに行きました。10年以上が経っていても、山肌には崩れた跡がはっきりと残っていて、先生が「この場所に家があったんです。」と説明してくれたときには、想像もできないような恐怖を感じました。

現地では、災害を経験した地域の方のお話も聞くことができました。あるおじいさんは「こんなことになるなんて思ってなかった。でも、避難するって決めるのは、いつも難しいんだ」と話してくれました。その言葉の背景には、災害の恐ろしさだけではなく、『どこまで危機を自分ごととして受け止められるか』という人間の弱さもあるように感じました。

ハザードマップを見ても、それを「本当に危ない」と思えるかどうか。自分自身がそれを信じて、早く動けるのか。私は、その難しさと大切さをこのとき強く感じました。地図に色がついている場所に、実際に大きな土石流が流れたという現実は、「見た目」ではなく「正確な情報」に目を向ける大切さを教えてくれました。

理科の授業というと、実験や公式を学ぶイメージが強かった私にとって、今回のような学びはとても新鮮でした。自然現象を知識として理解するだけではなく、それが人の命や生活とどう関わっているのかを学ぶこと。それこそが、理科を学ぶ意味なのだと気づかされました。

また、「災害を経験していない人が、それをどう受け取り、伝えていくか」も大切なテーマだと思いました。先生も、「私は当時いなかったけれど、現地の人から教えてもらったことを、次の世代に伝えていきたい」と話してくれました。私はその姿勢に強く心を打たれました。

来年度から私は高校生になります。この先もっと多くの知識や経験を積んでいく中で、今回の授業で学んだ「命と向き合う学び」を忘れずにいたいです。そして、もし自分の身近で災害が起きたときには、ハザードマップを手に取り、そこにある情報を信じて行動できるようになりたいと思います。